

北星学園大学大学院社会福祉学研究科 北星学園大学大学院論集第2号（通巻第14号）（2011年）・抜粋

# 自己愛類型別にみた大学生の対人関係および対人的価値観

——自己愛の2側面の視点から——

渡 辺 直 己

# 自己愛類型別にみた大学生の対人関係および対人的価値観 —自己愛の2側面の視点から—

## Personal Relations and Interpersonal Values of College Students in the Classified Narcissisms : From the Viewpoint of Two Faces of Narcissism

渡 辺 直 己

### 問題

現在のアメリカ精神医学会による精神疾患の診断・統計マニュアル (DSM-IV-TR) によれば、自己愛性パーソナリティ障害は誇大性、賞賛されたいという欲求、共感の欠如を主な特徴としている。しかし、Kohut (1971, 1977) が注目した低い自己評価、心気症、羞恥傾向など一見すると自己愛性パーソナリティ障害の特徴と相反する特性もまた、自己愛の一つの側面であるという考えが一般化している。これら双方の概念を統合する代表的な理論として、Gabbard (1994) による「無関心型」と「過敏型」の自己愛の2類型が知られ、両者の特徴は一見すると大きく異なっているが、どちらも「自己評価を維持しようと闘っている」点で共通しているという。中山・中谷 (2006) は、この Gabbard の考えに基づいて自己愛を自己価値・自己評価を維持する機能であると概念化しているが、このように自己愛を自己評価維持機能として定義することは、自己愛の2類型、および臨床群から健常群までの自己愛の問題を包括的に捉えることができるため、近年広く採用されている。

Gabbard (1994) はさらに、Wink (1991) が行った一般健常群を対象とする実証的研究

から自己愛が2つの直交成分からなる結果が得られたことを挙げ、2つの類型はいわば連続体の2つの極にあり、自己愛的な人の多くは両者が混在した形をとると述べている。

わが国における自己愛類型化の研究として小塩 (2002)、清水ら (2006) などが知られているが、中山・中谷 (2006) は Gabbard (1994) に純粹に依拠する形で自己愛類型化を図っている。その中で「過敏型」自己愛を「他者によって自己価値・自己評価が低められるような証拠がないことを確認することによって」、「誇大型」自己愛を「他者によらず、自らを肯定的に認識することで」とともに自己価値・自己評価を肯定的に維持しようとするはたらきであると定義し、「評価過敏性—誇大性自己愛尺度」を作成した。かれらは2つの因子が無相関の直交成分であることを見出し、さらに「混合型」、「誇大型」、「低自己愛型」、および「過敏型」の4類型を得ている。

しかし、各類型の特徴については注目欲求、対人恐怖など断片的なパーソナリティ特性との関連から探索的に検討されているのみであり、いまだ知見に乏しいといえる。自己愛パーソナリティの問題は対人関係の領域で特徴的に表れると考えられるため、それぞれの類型が示す対人関係や対人的な態度をより総合的

に検討することが必要であり、そこで得られた知見から、各類型が自己愛のさまざまな特徴をどのように反映するのかを解明できると考えられる。また、男女別による各自己愛類型の特徴についての知見は全く得られていないが、男女が示す対人関係の特徴には違いがあるため（上瀬，2000）、対人関係の視点から自己愛類型を考える上でも性差を考慮して検討することが重要であると考ええる。

また、Gabbard（1994）をはじめとする自己愛理論は、主に自己愛性パーソナリティ障害を対象としているが、パーソナリティ障害は対象関係と大きく関わっており、対人関係の問題を自己愛との関連で検討する場合、対象関係の視点から取り扱うのが適切であると考えられる。対象関係とは、個人が対象とどのような関わりを持つか、あるいは対人場面での態度や行動を意味しており、精神分析的研究では個人の内面における心理プロセスを強調しているものの、対人関係とはほぼ同義で用いられることもあり、多義的に取り扱われている（井梅，2001）。我が国における対象関係を測定する質問紙の代表的なものとして、「青年期用対象関係尺度」（井梅ら，2006）があり、これは対人関係の測定にも使用可能であるとされている。この尺度については5因子構造が明らかにされているものの、男女別に因子構造の検討はなされていないことが課題であると考ええる。

さらに、本研究では対人関係を方向づける特性として、個人が対人関係でどのようなことを重視しているのかといった背景要因もまた、自己愛と対人関係との関連を検討する上で重要であると考ええる。ゴードン・菊池（1975）は「価値（value）」について、「個人がそれを重要と考える一般化された行動、あるいは事態を示す概念である」と定義し、価値は態度の背後にあるもので、規範や基準、指針としてはたらき、行動にエネルギーを与えるはたらきをするものであると述べている。

そのため、いわゆる自己愛的な人の価値観は自己愛性格に特徴的な対人場面での考えや行動を方向づけるものと想定できる。

ゴードン・菊池（1975）は個人と他の人びととの人間関係についての価値を「対人関係価値」と定義し、米国での調査をもとに対人関係価値尺度を作成している。その後、鄭（1987）によって対人関係価値尺度を参考に東洋文化を考慮した「対人的価値観質問紙」が作成され、その結果得られた「指導・承認」因子は他の人々の上に立つことや、他の人々から称賛、注目を受けることが重要であることを意味しており、自己愛の特性と関連が大きい可能性が考えられる。なお、本研究では鄭（1987）に倣い、対人関係価値を今後は「対人的価値観」と称する。

ここで自己愛パーソナリティが示す対人関係および価値観について考えると、中山（2008）が総説で米国の研究を取り上げてまとめたところによれば、自己愛的な人は非常に肯定的な自己評価を維持するという目標に向かい、さまざまな認知的・行動的な自己調整方略を用い、自己愛的でない人に比べてより積極的な対処方略を用いることがわかっているという。そして、自己愛的な人は自己の認知様式を変えるよりも、他者に対して敵意などの否定的感情を向ける直接的な対処方略に依拠しやすい可能性を指摘している。さらに、自己愛的な人は知性、身体的魅力、リーダーシップを重視しているという。

これらのことを考え合わせると、自己愛的な人は自己評価の維持に特に熱心であるために対人関係は自己中心的であり、他者に対して優位に立ち、社会的に影響力を発揮するというような自己顕示的・支配的なあり方に価値を置く傾向があるものと考えられる。なお、これら米国の研究では自己愛の測定にNPI（Narcissistic Personality Inventory）が用いられている。NPI得点には主に自己愛の無関心型の側面が反映されるといわれているた

め(上地・宮下, 2005; 相澤, 2002)、米国の研究における価値観の傾向はおおむね自己愛の誇大性の側面に該当すると考えられる。

そこで、「過敏型」についてこれまで論じられてきた特徴を概観すると、まず Gabbard (1994) によれば、抑制的、内気、注目されるのを避ける、羞恥や恥辱を感じやすいという。また岡野(1998)によれば、「過敏型」もまた誇大的な理想自己を持ち、「理想自己」に頻繁に拠点を求めるのが Gabbard による「無関心型」であり、「恥ずべき自己」を仮のアイデンティティとする傾向が強いのが「過敏型」であるという。また、Kohut は主として過敏型の自己愛に焦点を当てているといわれ (Gabbard, 1994; 上地・宮下, 2005)、彼は自己愛の病理のメカニズムを、自らの誇大性を否認する「垂直分割」の機制により説明している (Kohut, 1971, 1977)。臨床経験に基づくこれらの論述は、自己愛の「過敏型」が誇大性を内に秘めていることを示唆している。さらに Kohut (1971, 1977, 1984) による自己対象の概念によれば、自己愛の障害を有する者は他者と一体になりたいという要求を強く持つと考えられる。

これらより、無関心型と過敏型はともに自己顕示欲求を強く持っているが、無関心型は自己顕示を実現できるためにそれが表に現れ、周囲に積極的に働きかける方略を用いるのに対して、過敏型は自己顕示の実現が阻害されている状態にあり、理想とするふるまいができないために恥を感じ、対人場面に消極的になるという逆説的な方略を用いるのではないかと推測できる。また、中山・中谷 (2006) によれば、誇大性が低く評価過敏性が高い「過敏型」は最も適応が低く、両者ともに高い「混合型」は誇大性を保ちつつ他者の評価を気にする葛藤を有しており、誇大性が高く評価過敏性が低い「誇大型」は自尊心につながる適応的な自己愛であると論じている。

以上のことを考えあわせると、中山・中谷

(2006) の自己愛類型が示す対人関係および対人的価値観は次のような特徴を有する可能性が考えられる。まず対人関係については、「過敏型」は対人関係が希薄で回避的であるが一体性を求める。「混合型」は自己中心的であり一体性を求め、誇大性を保つために過敏型ほど対人関係が希薄で回避的ではない。「誇大型」は自己中心的であるが混合型や過敏型に比べると対人関係は全体的により適応的である。「低自己愛型」は他と比べて自己中心的ではなく、「混合型」や「過敏型」に比べて対人関係は全体的により適応的である。一方、対人的価値観については「混合型」、「誇大型」、および「過敏型」はいずれも自己顕示的・支配的な価値観が大きい、「低自己愛型」はこれらより小さい。また、「誇大型」は適応的である可能性があるため、「混合型」および「過敏型」よりも同調、支持、親和的な価値観が大きい特徴を有する可能性が考えられる。

## 目的

本研究では、中山・中谷 (2006) の評価過敏性—誇大性自己愛尺度および自己愛類型化を用いて、自己愛の2つの側面がさまざまな対人関係の問題および対人的価値観に対してどのような影響を及ぼしているのか、また各自己愛類型の該当者がどのような対人関係の問題を有し、対人的価値観の特徴がどのようなものであるか、さらにこれらについて男女間でどのような共通点や相違がみられるのかを明らかにすることによって、自己愛の2側面および各自己愛類型が示す特徴を実証的に検討することを目的とする。

## 方法

### 1. 調査方法および調査協力者

S市内の大学生354名を対象に大学の授業

中に質問紙調査を実施した。調査時期は2008年7月及び10月であり、回答時間は10～15分であった。質問紙は回答終了後ただちに回収し、そのうち記入漏れ、不適切な回答のあったものを除いた316名（平均年齢19.51歳）のデータを分析対象とした。なお、男女別内訳は、男性134名（平均年齢19.72歳）、女性182名（平均年齢19.36歳）であり、調査協力者の年齢範囲は18歳～23歳であった。

## 2. 質問紙の構成

質問紙は年齢と性別を記入するフェイスシートほかに以下の内容から構成した。

### (1) 評価過敏性—誇大性自己愛尺度

自己愛の評価過敏性および誇大性の2側面を測定することを目的として、中山・中谷（2006）により作成された。全18項目について、「まったく当てはまらない」から「とても当てはまる」までの5件法で回答を求めた。

### (2) 青年期用対象関係尺度

BORI (Bell Object Relations Inventory; Bell, Billington & Becker, 1986) をもとに井梅（2001）が作成した対象関係尺度について、井梅・平井・青木・馬場（2006）がさらに改良を加えたものである。改良前の尺度の臨床的有用性を残し、単純構造の因子から構成される尺度開発を目的に作成されたものである。臨床現場における第一次的な情報収集の目的が想定されているが、一般青年の自己理解や一般的なパーソナリティの研究、対人関係の研究にも使用できるとしている。従って本研究では、対人関係の問題を全般的に測定する尺度として使用した。全29項目について、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までの6件法で回答を求めた。

### (3) 対人的価値観尺度

日本と中国の価値観に関する比較尺度作成

の目的で、鄭（1987）により作成された尺度である。対人関係価値尺度（ゴードン・菊池, 1975）等を参考に、東洋文化の特徴をより適切に表す質問項目を収集し予備調査を経て作成された。「まったく重要でない」から「きわめて重要である」の7件法で回答を求めた。

## 結果

### 1. 評価過敏性—誇大性自己愛尺度の因子分析と下位尺度得点の男女間比較

男女とも1つの項目「自分の体を人に自慢したい」にフロア効果が認められたため除外したうえで、全調査協力者および男女別の各場合について、重みづけのない最小二乗法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、先行研究（中山・中谷, 2006）と同一の2因子解が得られた。

ここで因子抽出法として用いた重みづけのない最小二乗法は先行研究（中山・中谷, 2006）でも用いられており、元のデータの分散・共分散行列と、因子分析のモデルから推定される分散・共分散行列（あるいは双方の相関行列）の差の平方和が最小になるように因子を抽出する方法であり、コンピュータの性能が上がったため、最近では使われることが多い（中田・廣瀬, 2007）。そのため本研究では他の尺度の場合でも同じ因子抽出法を用いた。

因子間相関の値は非常に小さく（男性；.12、女性；-.05、全体；.01）、両因子が直交していると判断できるため、重みづけのない最小二乗法、バリマックス回転による因子分析を行った結果、プロマックス解と同じ2因子解が得られ、各因子を構成する項目は全調査協力者、男性、女性の各場合とも同一であった。全調査協力者についての因子分析結果を表1に示す。

各因子で構成されるそれぞれの下位尺度のクロンバックの $\alpha$ 係数（以下、 $\alpha$ 係数）を算

表1 評価過敏性—誇大性自己愛尺度の因子分析結果（全調査協力者）

	F1	F2	$h^2$
<b>&lt;誇大性 <math>\alpha = .851</math>&gt;</b>			
9. 私は、周りの人からもっと高く評価されてもよい人間だと思う	.697	.264	.556
15. 自分はきっと将来成功するのではないかと思う	.682	-.209	.509
8. 私は他に並ぶ人がいないくらい、特別な存在である	.663	.105	.451
1. 自分にはどこか、他の人をひきつけるところがあるようだ	.663	.014	.440
11. 私には持って生まれたすばらしい才能がある	.652	-.097	.434
14. 自分自身では、要領もいいし、うまく判断のできるような賢さも備えていると思う	.625	-.133	.408
5. 私の意見どおりにすれば、もっとものごとがうまく進むのに、と思う	.620	.118	.399
18. 自分の考えや感情の豊かさ、感受性にはかなり自信がある	.554	-.051	.310
6. 私は今まで他の人にはできないような経験をつんできた	.508	.029	.259
<b>&lt;評価過敏性 <math>\alpha = .839</math>&gt;</b>			
16. 自分の欠点や失敗を少しでも悪く言われると、ひどく動揺する	-.035	.804	.647
13. 他人から間違いや欠点を指摘されると、憂うつな気分が続く	.079	.777	.610
3. 人となると、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる	-.120	.659	.449
10. 他人から間違いや欠点を指摘されると、自分の全てが否定されたように感じる	.000	.645	.416
2. 他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が価値のない人間になったような気がする	.120	.567	.336
17. 常にすぐれた人や目上の人に認めてもらえなければ、自信がもてない			
4. 人に軽く扱われて、あとですごく腹が立つことがある	.052	.548	.304
7. 周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる	-.171	.488	.267
固有値	3.67	3.44	
累積寄与率 (%)	21.56	41.79	

表2 評価過敏性—誇大性自己愛尺度における下位尺度得点の平均値と標準偏差

下位尺度	性別	平均値	標準偏差
誇大性	男性	2.69	.74
	女性	2.40	.62
	全体	2.52	.69
評価過敏性	男性	2.72	.79
	女性	2.84	.76
	全体	2.79	.77

出した結果、高い信頼性が確認された（表1）。全調査協力者あるいは男女別に各下位尺度の全項目の得点を合計して項目数で割った値を算出し、これを下位尺度得点とした。下位尺度得点の平均値および標準偏差を表2に示す。

次に、「誇大性」得点および「評価過敏性」得点の平均値について男女差がみられるかを検討するため、各下位尺度得点についてt検定を行った結果、誇大性得点については有意な差がみられ（ $t(314) = 3.82, p < .001$ ）、女性よりも男性の平均値の方が大きいことが明らかとなった。一方、評価過敏性得点については有意な差がみられず（ $t(314) = -1.31, n.s.$ ）、男女の得点の平均値に差があるとはい

えないことが明らかとなった。

## 2. 青年期用対象関係尺度の因子分析

男性については、1つの項目「母親なら、私の望みをかなえてくれて当然だ」にフロア効果が認められたため分析対象から除外し、残りの28項目について重みづけのない最小二乗法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、解釈可能性から5因子解が適切であると判断した。因子負荷量がいずれの因子に対しても.35に満たない項目および複数の因子で.40以上の値を示す3項目を削除した後、同じ手法で再度因子分析を行った結果、先行研究（井梅ら、2006）と類似の5因子構造が得られた（表3）。なお、1つの項目「私は完全に一心同体になれる人を求めている」は、いずれの因子についても因子負荷量が.40未満であったため分析対象から除外した第1因子、第3因子、および第4因子は、全項目がそれぞれ先行研究（井梅ら、2006）における「見捨てられ不安」、「希薄な対人関係」および「親和不全」の各因子の項目であったた

表3 青年期用対象関係尺度の因子分析結果（男性）

	F1	F2	F3	F4	F5
<b>&lt;見捨てられ不安 <math>\alpha = .816</math>&gt;</b>					
29. 私は他人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい	.781	.033	-.076	.031	.066
10. ひょっとして大切な人から拒絶されるのでは、という恐れをいだくことがある	.704	-.015	.059	.002	-.203
15. 私は人と接する時、人の顔色をととても気にする	.663	-.046	-.072	-.044	.101
5. 何かにつけて置いてきばりにされそうで、よく心配になる	.554	.240	-.024	.148	.021
28. とても親しい相手であっても、いつか裏切られるのではという不安を感じる	.521	-.007	.199	.010	.069
25. 身近な人が私以外のものに気をとられたら、拒絶された感じがして傷つく	.463	.239	.008	-.051	.004
14. 私は完全に一心同体になれる人を求めている *	.380	.348	.027	-.181	.163
<b>&lt;一体性の過剰希求 <math>\alpha = .748</math>&gt;</b>					
4. 親しい人とは、何をしても一緒に行動をしないと気が済まない	-.145	.805	-.043	.245	.087
24. 私は常に誰かと一緒にいないと不安である	.050	.686	.019	.043	-.154
9. 親しい人には、自分を“100%”受け入れてもらいたい	.202	.586	-.173	.030	-.205
23. 人との関係で私が重点を置くことは、常に相手より優位な立場になることである	.056	.481	.152	-.047	.284
19. 私を本当に想ってくれる人なら、私の要求をすべて受け入れてくれるはずである	.124	.459	.097	-.229	.049
<b>&lt;希薄な対人関係 <math>\alpha = .742</math>&gt;</b>					
7. 私には、本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる (-)	-.016	.001	.806	-.047	.040
2. 本当に自分を理解してくれていると思える人がいる (-)	-.035	-.024	.729	-.098	-.013
17. 私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている (-)	-.022	-.041	.493	.305	.003
22. 友人関係は比較的安定している (-)	.021	.029	.426	.234	-.016
12. 私は親しい人（家族や恋人、親友など）に自分の要求を適切に伝えることが出来る (-)	.114	.047	.417	.137	-.137
<b>&lt;親和不全 <math>\alpha = .804</math>&gt;</b>					
11. 私は人となかなか親しくなれない	-.139	.059	.098	.854	.035
1. 私は、人とどうやって会ったり話したりしていいのかわからない	.121	-.015	-.030	.675	.066
21. 人のそばにいと、緊張して落ち着かないことが多い	.151	.073	.178	.582	-.028
<b>&lt;自己中心的な他者操作 <math>\alpha = .639</math>&gt;</b>					
8. 私には、欲求を満たそうとして、自分の思い通りになるよう相手を仕向けるところがある	.075	.160	-.135	.090	.576
3. 人を思い通り動かすのは、私の密かな楽しみである	-.303	.395	-.026	-.057	.562
26. 私には、親しい相手との関係を、自分から切ってしまう所がある	.023	-.110	.011	.159	.549
6. 私は自分の心に壁を作ってしまう、周りをよせつけないところがある	.246	-.366	-.074	.233	.526
18. 自分の欲望を満たすために、人を利用することは悪いことではないと思う	.039	-.042	.094	-.384	.473
固有値	4.23	3.47	2.45	3.07	2.57
因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
		.41	.09	.42	.33
	F2		.01	-.11	.33
	F3			.33	.18
	F4				.09

(-) : 逆転項目      \* : 削除項目

め、先行研究と同一の因子名とした。第2因子（5項目）は、4項目が先行研究の「一体性の過剰希求」因子の項目であり、残りの1項目「人との関係で私が重点を置くことは、常に相手より優位な立場になることである」が同じく「自己中心的な他者操作」因子の項目であり、先行研究とはやや異なる結果となった。しかし、因子全体としてはおおむね「一体性の過剰希求」を表すと判断し、同じ因子名とした。

第5因子（5項目）は、2項目（「私には、親しい相手との関係を、自分から切ってしまうところがある」「私は自分の心に壁を作ってしまう、周りをよせつけないところがある」）が先行研究の「親和不全」因子の項目であり、残り3項目が同じく「自己中心的な他者操作」

因子の項目であった。ここで第4因子と第5因子の「親和不全」因子由来の項目内容を比較すると、第4因子は他者との関わりがうまくいかない内容であるのに対して、第5因子の該当項目は他者との関係を拒否するもので、一種の他者操作と解釈できることから因子名を同じく「自己中心的な他者操作」とした。各因子で構成されるそれぞれの下位尺度の $\alpha$ 係数を算出した結果、第1～第4因子では信頼性が十分であることが確認され、第5因子では $\alpha = .639$ とやや低いものの許容範囲内であると判断した（表3）。

次に女性の場合、すべての項目で天井効果およびフロア効果が認められなかったため、全29項目について男性の場合と同じ手法で因子分析を行った結果、解釈可能性から先行研

表4 青年期用対象関係尺度の因子分析結果(女性)

	F1	F2	F3	F4	F5
<b>&lt;一体性の過剰希求 <math>\alpha = .816</math>&gt;</b>					
4. 親しい人とは、何をしても一緒に行動をしないと気が済まない	.660	.042	.054	-.058	.033
24. 私は常に誰かと一緒にいないと不安である	.630	.282	-.122	.000	-.170
9. 親しい人には、自分を“100%”受け入れてもらいたい	.603	.112	-.177	-.179	.022
14. 私は完全に一心同体になれる人を求めている	.602	-.023	.071	-.044	.157
19. 私を本当に想ってくれる人なら、私の要求をすべて受け入れてくれるはずである	.560	-.253	.084	.042	.127
25. 身近な人が私以外のものに気をとられたら、拒絶された感じがして傷つく	.559	.236	-.061	.151	.048
27. 母親なら、私の望みをかなえてくれて当然だ	.497	-.182	.011	.026	.171
20. 親しい人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく	.430	.223	.074	.076	-.091
<b>&lt;見捨てられ不安 <math>\alpha = .836</math>&gt;</b>					
28. とても親しい相手であっても、いつか裏切られるのではという不安を感じることもある	-.136	.725	-.052	.220	.204
29. 私は他人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい	.064	.720	.054	-.029	-.043
10. ひょっとして大切な人から拒絶されるのでは、という恐れをいだくことがある	.120	.691	-.023	-.018	-.034
15. 私は人と接する時、人の顔色をとても気にする	-.149	.641	.272	-.158	.058
5. 何かにつけて置いてきばりにされそうで、よく心配になる	.321	.476	.170	.096	-.124
16. 私は他人と深くつき合うことを恐れている*	-.164	.428	.415	.067	.143
<b>&lt;親和不全 <math>\alpha = .831</math>&gt;</b>					
11. 私は人となかなか親しくなれない	.027	-.030	.805	.070	-.113
6. 私は自分の心に壁を作ってしまう、周りをよせつけないところがある	-.142	.146	.719	-.099	.051
21. 人のそばにいと、緊張して落ち着かないことが多い	.086	.111	.680	-.050	.002
1. 私は、人とどうやって会ったり話したりしていいのかわからない	.141	.076	.639	.071	-.084
<b>&lt;希薄な対人関係 <math>\alpha = .802</math>&gt;</b>					
7. 私には、本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる (-)	.049	.063	-.145	.926	-.021
2. 本当に自分を理解してくれていると思える人がいる (-)	-.205	.129	.029	.718	.062
17. 私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている (-)	-.016	-.227	.349	.554	-.035
22. 友人関係は比較的安定している (-)	.105	-.014	.055	.518	.015
<b>&lt;自己中心的な他者操作 <math>\alpha = .704</math>&gt;</b>					
3. 人を思い通り動かすのは、私の密かな楽しみである	.059	.082	-.018	-.140	.742
13. 自分が思う通りに人の気持ちを仕向けていくことが、人とのつきあいで重要なことである	.067	.042	.028	.031	.511
8. 私には、欲求を満たそうとして、自分の思い通りになるよう相手を仕向けるところがある	.022	.245	-.206	-.036	.494
23. 人との関係で私が重点を置くことは、常に相手より優位な立場になることである	.314	-.168	.218	.017	.485
18. 自分の欲望を満たすために、人を利用することは悪いことではないと思う	.031	-.117	-.095	.258	.451
固有値	4.25	4.75	4.32	3.80	2.24
因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
		.47	.16	.08	.26
	F2		.38	.32	.12
	F3			.57	.04
	F4				.19

(-) : 逆転項目、\* : 削除項目

究と類似した5因子解が適切であると判断した。因子負荷量がいずれの因子に対しても.35に満たない2項目を削除した後に同じ手法で再度因子分析を行い、先行研究(井梅ら, 2006)と同様の5因子構造を得た(表4)。

なお、項目「私は他人と深くつき合うことを恐れている」は複数の因子に対して因子負荷量が.40以上であったため分析対象外とした。

第1因子(8項目)は、6項目が同じ先行研究における「一体性の過剰希求」因子の項目であり、2項目(「身近な人が私以外のものに気をとられたら、拒絶された感じがして傷つく」「親しい人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく」)が同じく「見捨てられ

表5 青年期用対象関係尺度の下位尺度得点の平均値

下位尺度	男性	女性
見捨てられ不安	3.29 (1.00)	3.64 (1.08)
希薄な対人関係	2.54 (.81)	2.39 (.93)
親和不全	3.06 (1.15)	3.22 (1.10)
一体性の過剰希求	2.65 (.91)	2.69 (.86)
自己中心的な他者操作	3.21 (.89)	2.66 (.76)

※カッコ内は標準偏差

不安」因子の項目であった。先行研究では両因子間の正の相関がかなり高く、また後者2項目の内容は、前者の因子の内容と関連が大きいと考えられるため、第1因子はおおむね「一体性の過剰希求」の内容を表すと判断し、



同じ因子名とした。

第2因子～第5因子は、いずれも全項目がそれぞれ先行研究の「見捨てられ不安」、「親和不全」、「希薄な対人関係」、および「自己中心的な他者操作」の各因子の項目であったため、いずれも先行研究と同じ因子名とした。各因子で構成されるそれぞれの下位尺度の $\alpha$ 係数を算出した結果、信頼性が十分であることが確認された（表4）。

続いて、男女双方の各下位尺度の全項目の得点を合計して項目数で割った値を算出し、これを下位尺度得点とした。青年期用対象関

係尺度の各下位尺度得点の平均値と標準偏差を表5に示す。

### 3. 対人的価値観尺度の因子分析

男性の場合、2つの項目（「悩みを打ち明けられる人がいる」「親友と呼べる友だちがいる」）が天井効果を示したため分析の対象外とし、残りの41項目について重みづけのない最小二乗法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、解釈可能性から4因子解が適切であると判断した。因子負荷量がいずれの因子に対しても.35に満たない2項目を

表6 対人的価値観尺度の因子分析結果（男性）

	F1	F2	F3	F4
<b>&lt;指導・承認 <math>\alpha = .889</math>&gt;</b>				
34. グループの中で、注目の的になる	.894	-.003	-.062	-.117
40. 自分のしたことが注目される	.856	.057	-.046	-.175
24. 自分の考えが人の行動を左右する	.680	.151	-.049	-.057
31. 他人の知らない面白い話をする	.679	.070	-.059	-.003
4. 所属している集団のリーダー格になる	.668	.062	.022	-.124
33. 目上の人から期待されることをする	.571	-.021	.110	-.011
27. 自分の経験した冒険を人に話す	.569	-.027	-.154	.195
1. リーダーとして尊敬される	.536	.048	.146	.092
7. 重要な人物として認められる	.533	-.068	.299	.047
15. 大いに人々の前で発言する	.506	.249	-.227	.258
11. 広い範囲の人々に名前を知られる	.459	-.063	.135	-.008
37. いつも仲間といっしょにいる	.418	-.193	.189	.208
<b>&lt;独立・真実 <math>\alpha = .854</math>&gt;</b>				
21. 他人に言われても、気が変わらない	.025	.731	-.138	.031
8. 他人の言うことにまどわされない	-.004	.709	-.093	-.076
3. 他人の意見にまどわされず決定を下す	-.039	.681	.046	-.065
16. 自分のことはすべて自分で決定する	-.076	.623	.124	-.160
17. 真実を追求する	.088	.586	.119	-.132
22. あいまいな態度をとらない	.072	.540	.017	.083
35. 他人に依存しないで、仕事をする	.053	.522	.032	-.032
12. 型にはまらず、自分の考えで行動する	.147	.507	-.097	.197
30. 何かをする前に、他人の気持ちを考える	-.020	.507	.212	.268
36. 物事の筋を通す	.018	.461	.118	-.008
23. 他人のために自分の時間を使う	.120	.416	.223	-.022
<b>&lt;同調 <math>\alpha = .810</math>&gt;</b>				
6. 一般に正しいと思われる生き方をする	-.029	-.115	.791	-.036
10. 常に道徳的に正しいことをする	-.078	.179	.752	-.186
42. 物事の善悪をはっきりさせる	.008	.227	.663	-.050
2. 社会的に正しいことをする	-.045	.195	.634	.103
14. 常に穏当なことをする	.125	.025	.469	-.134
26. 皆に受け入れられるように行動する	.348	-.222	.433	.188
38. 困っているとき、友達に助けてもらう*	-.066	.006	.390	.385
20. まわりの人々にあわせて行動する*	.134	-.234	.390	.039
43. 誰にでも寛大である*	-.003	.194	.358	.066
<b>&lt;支持・親和 <math>\alpha = .806</math>&gt;</b>				
19. 私を元気づけてくれる友人がいる	-.060	-.180	.046	.835
18. 自分自身のことを打ち明ける	.083	.006	-.339	.760
25. 理解のある友人を持っている	.084	.037	-.047	.699
9. 失敗した時、励ましてくれる人がいる	-.022	-.095	.088	.600
32. 病気の時、友達が気をつけてくれる	.163	.031	.258	.465
29. 物事を真剣に考える*	-.350	.242	.064	.461
41. 自分がやりたいと思うことをする*	-.184	.312	-.143	.383
固有値	6.67	5.09	5.33	4.90
因子間相関	F1	F2	F3	F4
F1		.12	.44	.38
F2			.22	.32
F3				.27

\*：削除項目

除き、再度同じ手法で因子分析を行った結果、先行研究（鄭，1987）とは異なる4因子構造が得られた（表6）。なお、因子負荷量がいずれの因子に対しても.40に満たない4項目（表6参照）については分析の対象外とした。

第1因子（12項目）は、10項目が同じ先行研究で得られた「指導・承認」因子からの項目であり、1項目「目上の人から期待されることをする」が同じく「同調」因子、1項目「いつも仲間と一緒にいる」が同じく「親和・利他」因子からの項目であった。これらのうち「同調」および「親和・利他」因子からの項目内容は、他の人々から好ましい注意を引くなどの「承認」の内容（ゴードン・菊池，1975）と関連が強く、ほぼ先行研究の「指導・承認」因子の内容を反映していると判断し、同じ因子名とした。

第2因子（11項目）は、6項目が先行研究の「独立」因子からの項目であり、3項目（「真実を追求する」「あいまいな態度をとらない」「物事の筋を通す」）が同じく「社会的真実」からの項目であり、2項目（「何かをする前に他人の気持ちを考える」「他人のために自分の時間を使う」）が同じく「親和・利他」因子からの項目であった。これらのうち、「社会的真実」因子および「親和・利他」因子由来の項目内容は、主体的に正しいことをするといった部分で、先行研究の「独立」および「社会的真実」の因子内容と共通していると判断し、因子名を「独立・真実」とした。

第3因子（6項目）は、5項目が先行研究の「同調」因子からの項目であり、1項目「物事の善悪をはっきりさせる」が同じく「社会的真実」因子からの項目であった。この1項目もまた、社会的に当を得た行動をするなどの「同調」の因子内容（ゴードン・菊池，1975）と関連が深いと判断し、因子名を同じく「同調」とした。

第4因子（5項目）は、4項目が先行研究

の「支持」因子からの項目であり、1項目「自分自身のことを打ち明ける」が「親和・利他」因子からの項目であったため、因子名を「支持・親和」とした。なお、「物事を真剣に考える」の項目は、第1因子にも大きな因子負荷量を示し、因子全体の解釈を考えると内容的に大きく逸脱しているため不良項目と判断し、以後の分析対象から除外した。各因子で構成されるそれぞれの下位尺度の $\alpha$ 係数を算出した結果、高い信頼性が確認された（表6）。

続いて女性の場合、4つの項目（「悩みを打ち明けられる人がある」「失敗した時、励ましてくれる人がある」「親友と呼べる友だちがいる」「理解のある友人を持っている」）が天井効果を示したため分析の対象外とし、残りの39項目について男性の場合と同じ手法で因子分析を行った結果、解釈可能性から4因子解が適切であると判断した。因子負荷量がいずれの因子に対しても.35に満たない7項目を除外した残りの32項目について再度同じ手法で因子分析を行った結果、男性と同様の4因子構造が得られた（表7）。因子負荷量がいずれの因子に対しても.40に満たない2項目（表7参照）は以後の分析の対象外とした。

第1因子（10項目）は、9項目が同じ先行研究の「指導・承認」因子の項目であり、1項目「目上の人から期待されることをする」が同じく「同調」因子の項目であった。後者については、「承認」の内容と関連が強いと判断し、因子名を「指導・承認」とした。

第2因子（9項目）は、5項目が先行研究の「独立」因子からの項目であり、4項目（「物事の筋を通す」「あいまいな態度をとらない」「物事を真剣に考える」「真実を追求する」）が同じく「社会的真実」からの項目であった。従って、因子名を男性の場合と同様に「独立・真実」とした。

第3因子（7項目）は、4項目が先行研究

表7 対人的価値観尺度の因子分析結果（女性）

	F1	F2	F3	F4
<b>&lt;指導・承認 <math>\alpha = .872</math>&gt;</b>				
34. グループの中で、注目的になる	.790	-.124	.030	.001
40. 自分のしたことが注目される	.757	.073	.015	-.030
4. 所属している集団のリーダー格になる	.751	.111	-.215	.030
11. 広い範囲の人々に名前を知られる	.696	-.061	.024	.014
33. 目上の人から期待されることをする	.648	-.009	.093	.026
1. リーダーとして尊敬される	.623	.034	-.089	-.037
7. 重要な人物として認められる	.610	.000	-.030	.209
27. 自分の経験した冒険を人に話す	.538	.065	.214	-.158
24. 自分の考えが人の行動を左右する	.445	-.041	.020	.136
31. 他人の知らない面白い話をする*	.381	.133	.182	-.188
<b>&lt;独立・真実 <math>\alpha = .791</math>&gt;</b>				
8. 他人の言うことにまどわされない	.009	.706	-.007	-.039
36. 物事の筋を通す	.030	.608	-.043	.169
3. 他人の意見にまどわされず決定を下す	.052	.603	-.045	-.085
12. 型にはまらず、自分の考えで行動する	.091	.591	-.067	-.185
21. 他人に言われても、気が変わらない	-.089	.527	-.073	.075
16. 自分のことはすべて自分で決定する	.037	.509	-.008	-.002
22. あいまいな態度をとらない	.017	.482	.065	.121
29. 物事を真剣に考える	-.028	.433	.224	.057
17. 真実を追求する	.013	.412	.210	.150
<b>&lt;支持・親和 <math>\alpha = .763</math>&gt;</b>				
19. 私を元気づけてくれる友人がいる	-.033	-.020	.757	-.028
38. 困っているとき、友達に助けてもらう	.005	-.017	.677	-.079
18. 自分自身のことを打ち明ける	-.055	.102	.612	.011
32. 病気の時、友達が気をつかってくれる	.174	-.062	.535	-.148
30. 何かをする前に、他人の気持ちを考える	-.163	.311	.482	-.010
43. 誰にでも寛大である	.033	.117	.461	.072
37. いつも仲間といっしょにいる	.044	-.158	.434	.098
26. 皆に受け入れられるように行動する*	.121	-.319	.370	.280
<b>&lt;同調 <math>\alpha = .790</math>&gt;</b>				
10. 常に道徳的に正しいことをする	-.051	.071	-.066	.861
6. 一般に正しいと思われる生き方をする	-.033	-.130	-.033	.775
2. 社会的に正しいことをする	.138	.145	-.157	.601
14. 常に穏当なことをする	-.010	-.057	.238	.512
42. 物事の善悪をはっきりさせる	.012	.253	.085	.472
固有値	4.97	3.35	3.94	3.46
因子間相関	F1	F2	F3	F4
F1		.01	.41	.29
F2			.10	.22
F3				.33

\*：削除項目

表8 対人的価値観尺度の下位尺度得点の平均値

下位尺度	男性	女性
指導・承認	3.98 (.97)	3.65 (.90)
独立・真実	5.10 (.77)	5.07 (.68)
同調	4.86 (1.00)	4.80 (.93)
支持・親和	5.42 (.94)	5.12 (.75)

※カッコ内は標準偏差

の「親和・利他」因子からの項目であり、3項目（「私を元気づけてくれる友人がいる」「困っているとき、友達に助けてもらう」「病気の時、友達が気を使ってくれる」）が同じく「支持」因子からの項目であった。従って因子名を男性の場合と同様に「支持・親和」とした。

第4因子（5項目）は、4項目が先行研究の「同調」因子からの項目であり、1項目「物事の善悪をはっきりさせる」が同じく「社会的真実」因子からの項目であった。この項目は先行研究においても「同調」因子に高い因子負荷量を示していたため（鄭, 1987）、「同調」の内容が反映されていると判断し、因子名を男性の場合と同様に「同調」とした。

各因子で構成されるそれぞれの下位尺度の $\alpha$ 係数を算出した結果、信頼性は十分であることが確認された（表7）。

続いて、男女双方の各下位尺度の全項目の得点を合計して項目数で割った値を算出し、これを下位尺度得点とした。対人的価値観尺度の各下位尺度得点の平均値および標準偏差

を表8に示す。

#### 4. 重回帰分析

男女の各場合について、自己愛の2側面が対人関係の問題にどのような影響を及ぼしているのかを検討するため、「誇大性」および「評価過敏性」の両下位尺度得点を独立変数、青年期用対象関係尺度の5つの下位尺度得点を従属変数とする重回帰分析を行った(表9)。

重回帰分析の結果、男女ともすべての対人関係の問題について有意な決定係数が得られた。対人関係の問題のうち、「親和不全」と「希薄な対人関係」に対しては、男女とも「誇大性」は負の影響であるのに対して「評価過敏性」は正の影響を示した。一方、「一体性の過剰希求」および「自己中心的な他者操作」に対しては、自己愛の2側面とも正の影響を示した。

次に、男女別に自己愛の2側面が対人的価値観にどのような影響を及ぼしているのかを検討するため、「誇大性」および「評価過敏性」の両下位尺度得点を独立変数、対人的価値観尺度の4つの下位尺度得点を従属変数とする重回帰分析を行った(表10)。

重回帰分析の結果、男女とも「指導・承認」

が他よりも際立って高い決定係数を示した。

この「指導・承認」に対しては、男性の場合は「誇大性」のみが有意な正の影響を示し、女性の場合には自己愛の2側面がともに有意な正の影響を及ぼすことが明らかとなった。

#### 5. 調査協力者の自己愛類型化

中山・中谷(2006)の類型化方法は2つの下位尺度の標準得点を基準としており、本研究では男女で同じ基準による類型化を行うために、男女のサンプルを合わせて類型化を行うことにした。しかし、調査で得られた男女サンプル数の比率は1:1.36とやや女性が多く、すべてのサンプルを用いると女性の影響がやや大きく表れる可能性がある。

そのため、全女性調査協力者の182サンプルよりランダムに134サンプルを抽出した。抽出後のサンプルがもとの母サンプルの特徴を反映しているかどうかを確認するため、すべての下位尺度得点について対応のないt検定により両サンプルの平均値の比較を行った。その結果、全下位尺度について有意な差はみられず、従って、抽出したサンプルは母サンプルの特徴をそのまま反映していると判断し、男女合わせた自己愛類型化に用いた。

すべての男性調査協力者およびサンプル数

表9 対人関係の問題を従属変数とする重回帰分析結果(標準偏回帰係数)

独立変数	親和不全		関係希薄		見捨て不安		一体希求		自己中心	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
誇大性得点	-.30***	-.35***	-.29***	-.36***	-.01	-.28***	.21**	.21***	.38***	.28***
評価過敏性得点	.46***	.39***	.29***	.20**	.79***	.68***	.42***	.61***	.34***	.26***
R <sup>2</sup>	.28***	.29***	.16***	.18***	.62***	.56***	.24***	.40***	.29***	.14***

強制投入法 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

表10 対人的価値観を従属変数とする重回帰分析結果(標準偏回帰係数)

独立変数	指導・承認		独立・真実		同調		支持・親和	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
誇大性得点	.44***	.45***	.17*	.11	.11	.12	.10	.19*
評価過敏性得点	.14	.35***	-.08	-.07	.15	.09	.00	.11
R <sup>2</sup>	.22***	.30***	.03	.02	.04	.02	.01	.05*

強制投入法 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

調整後の女性調査協力者のデータを合わせて、中山・中谷（2006）の方法により調査協力者の自己愛類型化を行った（図1）。まず類型化の対象となる全調査協力者268名の評価過敏性得点および誇大性得点を標準得点化し、それぞれを座標平面上のx軸とy軸にプロットした。原点を中心として半径0.5SDの円内は「中心円内」とし、この部分を除く第1～第4象限にあるサンプルをそれぞれ「混合型」、「誇大型」、「低自己愛型」、「過敏型」の各類型に属するものとした。なお、「中心円内」については中山・中谷（2006）に倣い、考察の対象外とする。

男女別の各類型の度数および割合を表11に示す。性別と自己愛類型の両変数の独立性を検討するため $\chi^2$ 検定を行った結果、人数の偏りが有意ではなかったため（ $\chi^2(4, N=268) = 5.98, n.s.$ ）、両変数間に関連があるとはいえないことが明らかとなった。

## 6. 各下位尺度得点の自己愛類型間比較

各自己愛類型の全下位尺度得点について男女別に平均値と標準偏差を算出し（表12）、自己愛類型間で平均値に差があるかどうかを検討するため、男女別にそれぞれの下位尺度得点について自己愛類型を被験者間要因とする一要因分散分析を行った（表13）。

その結果、男女とも評価過敏性—誇大性自己愛尺度と青年期用対象関係尺度のすべての下位尺度、および対人的価値観尺度の「指導・承認」について要因の主効果が有意であり、自己愛類型によってこれらの下位尺度得点の

平均値に差があることが明らかとなった。

一方、対人的価値観尺度の他の3つの下位尺度については要因の主効果が有意ではなく、各自己愛類型間で平均値に差があるとはいえないことが明らかとなった。

次に、自己愛類型要因の主効果が有意であった下位尺度得点について、TukeyのHSD検定による多重比較を行った（表13）。

また、男女別の青年期用対象関係尺度の下位尺度得点の平均値のグラフを図2および図3に、対人的価値観尺度の「指導・承認」下位尺度得点の平均値のグラフを図4に示す。

多重比較の結果および各グラフが示す傾向から、青年期用対象関係尺度の各下位尺度得点については、「見捨てられ不安」では男女とも混合型と過敏型が低自己愛型と誇大型よりも大きく、「希薄な対人関係」では男女とも過敏型が誇大型よりも大きく、低自己愛型は両者の中間であり、混合型は男性の場合には中程度なのに対して女性の場合には低い値

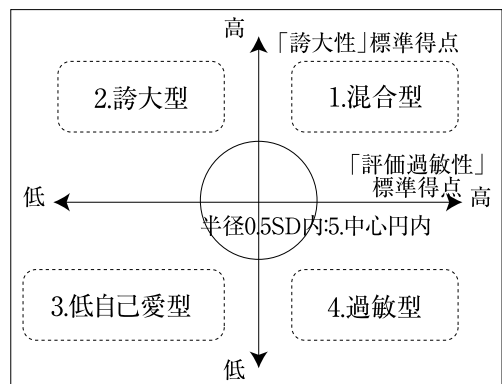


図1 中山・中谷（2006）による自己愛類型化

表11 各自己愛類型の度数および割合

		1. 混合型	2. 誇大型	3. 低自己愛型	4. 過敏型	5. 中心円内	合計
男性	度数	31	35	30	27	11	134
	(%)	(23.1)	(26.1)	(22.4)	(20.1)	(8.2)	(100.0)
女性*	度数	27	24	27	41	15	134*
	(%)	(20.1)	(17.9)	(20.1)	(30.6)	(11.2)	(100.0)
合計	度数	58	59	57	68	26	268
	(%)	(21.6)	(22.0)	(21.3)	(25.4)	(9.7)	(100.0)

\*：女性は全182人からランダムに134人を抽出したサンプルを用いた。

表12 自己愛類型別の各下位尺度得点の平均値と標準偏差

	全体		1. 混合型		2. 誇大型		3. 低自己愛型		4. 過敏型	
	男性	女性*	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
誇大性	2.69 (.74)	2.41 (.60)	3.39 (.58)	2.91 (.31)	3.21 (.34)	3.08 (.45)	1.97 (.42)	1.98 (.36)	2.08 (.30)	1.94 (.34)
評価過敏性	2.72 (.79)	2.86 (.73)	3.40 (.45)	3.50 (.54)	2.03 (.56)	2.11 (.33)	2.10 (.40)	2.13 (.38)	3.44 (.36)	3.37 (.40)
見捨てられ不安	3.28 (1.00)	3.67 (1.09)	3.95 (.65)	3.98 (1.00)	2.48 (.81)	2.58 (.88)	2.89 (1.00)	3.24 (.99)	3.90 (.71)	4.41 (.81)
希薄な対人関係	2.54 (.81)	2.38 (.91)	2.54 (.81)	2.02 (.72)	2.11 (.79)	1.98 (.73)	2.66 (.88)	2.47 (1.01)	2.90 (.67)	2.71 (1.00)
親和不全	3.06 (1.15)	3.13 (1.04)	3.25 (1.03)	3.18 (.84)	2.32 (1.01)	2.43 (.82)	3.24 (1.15)	2.94 (1.19)	3.67 (1.06)	3.65 (.96)
一体性の過剰希求	2.64 (.91)	2.71 (.81)	3.15 (.75)	3.19 (.85)	2.47 (.95)	2.55 (.97)	2.14 (.84)	2.09 (.65)	2.84 (.78)	2.85 (.63)
自己中心的な他者操作	3.21 (.88)	2.64 (.73)	3.86 (.83)	2.87 (.79)	3.15 (.78)	2.83 (.71)	2.58 (.72)	2.27 (.66)	3.28 (.78)	2.64 (.71)
指導・承認	3.98 (.97)	3.67 (.87)	4.46 (.79)	4.19 (.78)	4.29 (.81)	3.79 (.75)	3.42 (1.27)	3.21 (.82)	3.77 (.67)	3.59 (.91)
独立・真実	5.10 (.77)	5.07 (.68)	5.10 (.72)	5.14 (.63)	5.31 (.72)	5.41 (.73)	4.95 (1.04)	4.91 (.61)	4.92 (.57)	4.99 (.72)
同調	4.86 (1.00)	4.83 (.88)	5.04 (.97)	5.10 (.94)	4.95 (.82)	4.96 (.96)	4.52 (1.37)	4.53 (1.01)	4.80 (.77)	4.90 (.67)
支持・親和	5.42 (.94)	5.11 (.75)	5.48 (.78)	5.31 (.65)	5.51 (.94)	5.11 (.84)	5.29 (1.06)	4.99 (.71)	5.32 (1.07)	5.15 (.76)

カッコ内は標準偏差 ※：184人の中からランダムに134人を抽出したサンプルを用いた

表13 自己愛類型についての分散分析および多重比較の結果

下位尺度	男性		女性	
	F	多重比較 (Tukey)	F	多重比較 (Tukey)
誇大性	74.58***	1, 2>3, 4	65.55***	1, 2>3, 4
評価過敏性	73.45***	1, 4>2, 3	77.54***	1, 4>2, 3
見捨てられ不安	20.72***	1, 4>2, 3	19.05***	1, 4>2, 3
希薄な対人関係	4.46**	3, 4>2	4.20**	4>1, 2
親和不全	7.00***	1, 3, 4>2	6.54***	4>2, 3 1>2
一体性の過剰希求	6.25***	1, 4>3 1>2	8.35***	1, 4>3 1>2
自己中心的な他者操作	10.40***	1>2, 4>3	3.00*	1, 2>3
指導・承認	6.86***	1, 2>3 1>4	5.30**	1>3, 4
独立・真実	1.42n.s.		2.37n.s.	
同調	1.34n.s.		2.22n.s.	
支持・親和	.37n.s.		1.10n.s.	

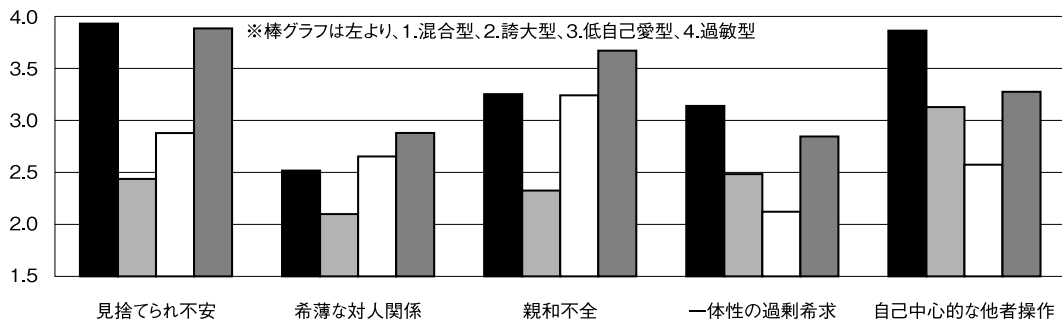
1：混合型、2：誇大型、3：低自己愛型、4：過敏型 \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$ 

図2 自己愛類型別にみた対人関係の各下位尺度得点の平均値 (男性)

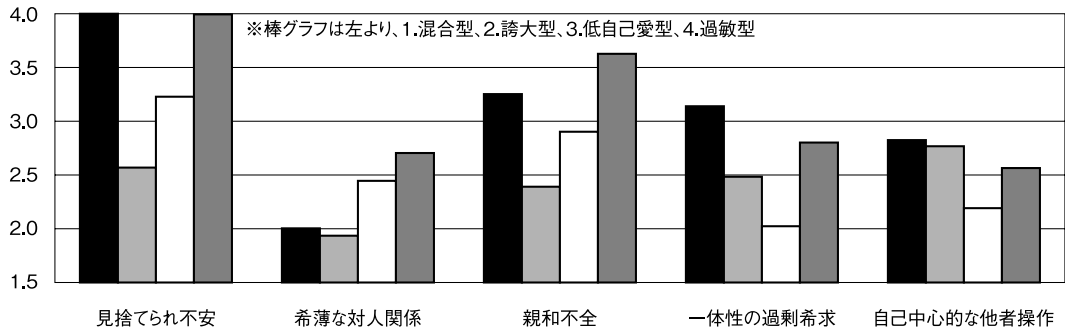


図3 自己愛類型別にみた対人関係の各下位尺度得点の平均値（女性）

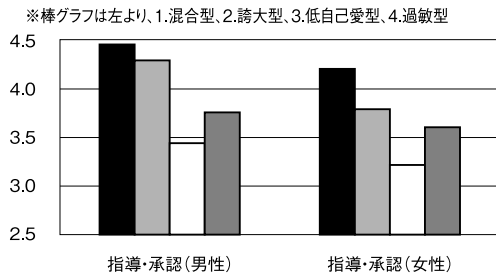


図4 「指導・承認」下位尺度得点の平均値

であった、「親和不全」では男女とも誇大型が他の3類型よりも低く、過敏型が最も高い値を示した。また、「一体性の過剰希求」と「自己中心的な他者操作」では男女とも混合型が最も高い値、低自己愛型が最も低い値を示したが、女性の「自己中心的な他者操作」の混合型は男性の場合ほど顕著に高い値を示さなかった。対人的価値観尺度の「指導・承認」得点については、男女とも混合型が最も高く、低自己愛型が最も低い値であった。

## 考察

### 1. 各尺度の因子分析結果および下位尺度の構成概念について

本研究における評価過敏性—誇大性自己愛尺度の因子分析結果から、同尺度は男女とも先行研究（中山・中谷，2006）と同一の「誇大性」および「評価過敏性」の2因子で構成されることが明らかになると同時に、男女別の場合でも2つの因子が互いに独立した直交

成分であることが確認された。

青年期用対象関係尺度については、井梅ら（2006）は男女合わせた調査協力者について因子分析を行い、全体の因子構造を明らかにした上で下位尺度得点の男女差を検討している。一方、本研究では因子構造について性差を明らかにした上で各下位尺度と自己愛との関連を検討することが妥当であると考え、青年期用対象関係尺度について初めて男女別に因子構造の検討を行った結果、男女間で因子構造が若干異なっていることが明らかとなった。先行研究では女性のサンプル数が男性よりも多く、調査協力者の年齢も18～29歳と本研究よりも範囲が広い。そのため、女性の特性が全体に影響した可能性、もしくは対象者の年齢の影響の可能性が考えられる。従って、この尺度を使用する際には性別あるいは対象年齢を考慮する方が望ましいといえよう。

男女双方の5因子のうち、「見捨てられ不安」、「希薄な対人関係」、および「親和不全」については、男女とも先行研究の同名因子の項目から構成され、女性については残りの2因子についてもほぼ同様であった。しかし男性の場合、先行研究における「自己中心的な他者操作」の一部と「親和不全」の中の関係回避に関する項目が同じ因子を構成し、また、先行研究での「自己中心的な他者操作」の中の1項目が「一体性の過剰希求」に混入した。

これらの男女間の因子構造の違いについては、前者の場合、関係回避の意味合いが男女

間で異なり、男性の場合に、より自己中心性と結びついている可能性、あるいは他者操作を志向する際に男性は女性に比べて実際に具現化させるよりもひきこもる選択をとりやすい可能性が考えられる。後者については、井梅ら（2006）は、「自己中心的な他者操作」と「一体性の過剰希求」がともに自己中心的な視点に立っていると述べており、男性で特に両者の関連が強い可能性が推測される。

これらより、男女間で自他の境界の未分化の意味合いが若干異なっており、男性は女性よりも自己中心性の傾向を強く持つために、自己中心性と関連した「一体性の過剰希求」因子に対して「自己中心的な他者操作」の概念がより強く結びついた可能性が考えられる。

以上のような男女間の違いが認められたものの、本研究より得られた男女それぞれの5因子構造は、おおむね先行研究（井梅ら、2006）で明らかにされた5因子と同様の内容であると考えられる。各下位尺度の構成概念については、井梅ら（2006）および井梅（2001）が対象関係に関する理論および5因

子性格尺度との関連から検討しており、そのおおまかな内容を表14に整理した。本研究結果を考える上で、先述の男女間の違いを踏まえつつも、各下位尺度の構成概念を表14の内容として把握することが可能であると同時に、有用であると考えられる。

一方、対人的価値観尺度については、鄭（1987）が男女合わせた調査協力者について対人的価値観尺度の因子分析を行い、直交回転によって「支持」、「同調」、「指導・承認」、「独立」、「社会的真実」、および「親和・利他」の6因子構造を見出している。しかし、6因子のうち5因子における $\alpha$ 係数は.70に満たない低い値であり、複数の因子について因子負荷量の高い項目が散見されるため、先行研究で採用された因子構造は信頼性に問題があるといえる。一方、本研究結果では男女間で項目内容は若干異なるものの、ほぼ共通した内容の4因子構造となった。また、いずれの下位尺度も $\alpha$ 係数の値が十分高かったこと、および斜交回転を用いた結果、実際に因子間に相関が認められたことから、本研究

表14 青年期用対象関係尺度の下位尺度の特徴〔井梅ら（2006）および井梅（2001）をもとに作成〕

下位尺度	対人関係の問題の傾向	共通点
親和不全（他者と関わりを持つことの困難）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対人的なやりとりにおいて壁を作り、緊張して打ち解けられない。</li> <li>・深くつき合うことを恐れる。</li> <li>・社会への不適応感、否定的評価に対する過敏性。</li> </ul>	相手との基本的信頼関係が築けない
希薄な対人関係（関係性維持の困難）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者との安定した関係を持続的に保つことができない。</li> <li>・実質的な中身を伴う対人交流ができず、相互理解やサポートの授受などが希薄な傾向がある。</li> </ul>	
自己中心的な他者操作（自己中心性）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のために他者が動いてくれることを当然と考え、また自分の欲求を実現するために他者を操作的に利用しようとする。</li> <li>・自己優位的な視点があること、健全な共感性が発達していないことが根底にある。</li> </ul>	自己中心的な視点に立っている。
一体性の過剰希求（自他の境界の未分化）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者と適切な心理的距離を保てず、自己と他者がそれぞれ独立した存在であるという認識が欠けている。</li> <li>・自分の要求や行動が相手と完全に共有されるはずだと思い、そのような相手を求める。</li> <li>・対象恒常性の欠落から、常に連絡を取っていないと相手の存在を確認できない。</li> </ul>	
見捨てられ不安（同）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親しい人から拒絶され取り残されることへの恐れや、相手の反応に過敏。</li> <li>・相手の機嫌を取ることに一生懸命になり、常に相手の顔色をうかがい、自分の気持ちを表明できない。</li> </ul>	

※下位尺度欄のカッコ内は、井梅（2001）における旧名称



結果は先行研究よりも高い信頼性を示したと同時に、因子構造の解釈も妥当であると考えられる。

本研究ではゴードン・菊池（1975）で得られた「指導的」と「承認的」の両因子が一体となったが、これは鄭（1987）と同様の結果であり、他人を指導、リードすることが他人に承認を求める手段となっていたり、あるいはその逆であったりする場合が考えられるという解釈（鄭，1987）が本結果にも当てはまると考えられる。また、鄭（1987）は「支持」と「親和・利他」の尺度内容が互に関連しており、ともに他人に助けってもらったり他人のために考えたりする対人関係が強調されていると述べている。このことから、本研究結果で両因子が一つにまとまったことについても妥当であると考えられる。

本研究で得られた4つの因子は先行研究（鄭，1987）の2つの因子がまとまったものも含めて、先行研究で明らかにされた各因子が表す内容を踏襲していると考えられる。ゴードン・菊池（1975）および鄭（1987）が論じた記述をもとに、各因子で構成される下位尺度が表す構成概念を簡単にまとめると以下のようになる。

「指導・承認」は他の人々の上に立ち、尊敬や称賛を受けることが重要であることを意味しており、本研究では自己顕示的・支配的な価値観として取り扱う。また、「独立・真実」は自己決定や社会的真実が、「同調」は社会的に当を得た行動や周囲から受け入れられる行動が、「支持・親和」は他人から理解され、親切や思いやりを受けることが、それぞれ重要であることに相当するといえるだろう。

## 2. 重回帰分析結果について

評価過敏性―誇大性自己愛尺度の下位尺度得点を独立変数、青年期用対象関係尺度の下位尺度得点を従属変数とする重回帰分析を男

女別に行った結果、男女とも「評価過敏性」から「見捨てられ不安」に対して強い正の影響がみられた。井梅ら（2006）によれば、「見捨てられ不安」尺度は親しい人から拒絶され取り残されることに対する恐れや、相手の反応に過敏な傾向を表していることから、「評価過敏性」と「見捨てられ不安」は互いに構成概念が重複する部分があるため、強い影響がみられたと考えられる。

また、「誇大性」からは男女とも「希薄な対人関係」および「親和不全」に対して負の影響が、「一体性の過剰希求」および「自己中心的な他者操作」に対して正の影響がみられた。

「誇大性」は他者によらずに自らを肯定的に認識する特性を表し、積極的に他者に対して業績を印象づけようと自己アピールを行う傾向につながるといわれる（Gabbard, 1994；中山・中谷，2006）。従ってこの結果は、対人志向的ではあるが自己中心的な対人関係の傾向に対して、実際に「誇大性」が影響を及ぼしていることを実証したといえる。

さらに「評価過敏性」もまた、男女とも自己中心性を表す「一体性の過剰希求」および「自己中心的な他者操作」に対して正の影響を示した。このことから、「評価過敏性」の側面もまた対人関係における自己中心的な傾向につながるということが実証的に明らかになったといえる。この点については、自己愛の障害のうち過敏で傷つきやすいタイプが優勢な者は他者に対する共感性に乏しいといわれていること（小松，2004）、および未熟な自己愛を持つ者は低い自己評価や羞恥傾向に苦しむ一方で、否認された形で幼児的誇大性を保持しているという Kohut（1971, 1977）の考えの妥当性を示唆する結果であると考えられる。

次に、評価過敏性―誇大性自己愛尺度の下位尺度得点を独立変数、対人的価値観尺度の下位尺度得点を従属変数とする重回帰分析を男女別に行った結果、対人的価値観の中では

男女とも従属変数が「指導・承認」の場合のみ、他よりも決定係数が顕著に高い結果となった。従って、自己愛は対人的価値観の中で自己顕示的・支配的な関わりを重要と考える「指導・承認」のみに影響を及ぼしていることが実証されたといえる。

自己愛の2側面をみると、「誇大性」は男女とも「指導・承認」に正の影響を及ぼしていた。「指導・承認」は他の人々の上に立ち、尊敬や称賛を受けることを重視する価値観であるため、その背後には積極的に他者に対して業績を印象づけようと自己アピールを行う傾向を示す特性である「誇大性」があることは当然であると考えられる。

一方、「評価過敏性」が「指導・承認」に及ぼす影響については、女性の場合に有意な正の影響が認められた。このことから、女性の自己愛の「評価過敏性」の側面は、自己顕示的・支配的な価値観を形成する要因である可能性が示唆されたといえる。一方、男性の場合にはこのような傾向は明確には認められなかった。このように、「評価過敏性」が「指導・承認」に及ぼす影響については、標準偏回帰係数が有意か否かについて男女間で違いはみられたものの、重回帰分析の結果からは男女間における影響の大小を単純に比較することはできない。従って、この点については今後の課題といえる。

### 3. 各自己愛類型が示す対人関係および対人的価値観の特徴

本研究では、自己愛類型を要因とする青年

期用対象関係尺度の各下位尺度の分散分析および多重比較を男女別に行った。井梅ら(2006)は、下位尺度の構成概念を検討したうえで、「親和不全」および「希薄な対人関係」の2因子は基本的信頼関係が築けない点で共通しており、「自己中心的な他者操作」、「一体性の過剰希求」、および「見捨てられ不安」の3因子は自己中心的な視点に立っている点で共通していると述べている(表14)。この観点を加味しながら、多重比較の結果(表13)および各類型における下位尺度得点の平均値の高低(図2、図3)に基づき、各自己愛類型が有する対人関係の問題の傾向について表15に示す。

まず、基本的な信頼関係が築けない点で共通する「希薄な対人関係」と「親和不全」については、2つの下位尺度得点のレベルは各類型でおおむね共通していた。ただし、混合型における「希薄な対人関係」が男性の方が高いレベルにあった点については、先行研究(井梅ら, 2006)の結果と共通しており、男性に多い社会的スキル不足を反映していることが述べられている。混合型と低自己愛型はどちらもおおむね中間レベルであるのに対して、過敏型ではどちらも高レベル、誇大型ではどちらも低レベルであり、対照的な傾向を示したといえる。

これに対して、自己中心的な視点に立っている点で共通する3つの下位尺度のうち、「一体性の過剰希求」と「自己中心的な他者操作」の2つがおおむね共通の傾向を示した。ただし、混合型における「自己中心的な他者

表15 各自己愛類型が示す対人関係の問題の傾向

下位尺度	見捨て不安	関係希薄	親和不全	一体希求	自己中心
1. 混合型	男性 女性	H L	M	H	H M
2. 誇大型	L	L	L	M	M
3. 低自己愛型	L	M	M	L	L
4. 過敏型	H	H	H	M	M

H：高レベル、M：中間レベル、L：低レベル

操作」が男性の方が高いレベルであった点については、これも先行研究（井梅ら、2006）の結果と共通しており、男性の方が自己中心性が高いことが述べられている。先の基本的信頼関係の問題を有する2つの下位尺度の場合とは対照的に、ここでは誇大型と過敏型がともに中間レベルであったのに対して、混合型がともにおおむね高レベル、低自己愛型がともに低レベルという対照的な傾向を示したといえる。残りの「見捨てられ不安」はいずれとも異なる傾向を示し、混合型と過敏型が高レベル、誇大型と低自己愛型が低レベルであった。

これらより、おおむねすべての対人関係の問題について、誇大型と過敏型、混合型と低自己愛型がそれぞれ対照的な特徴を持つことが明らかになった。これは自己愛類型化のものになっている自己愛の2つの直交成分が、青年期用対象関係尺度の5つの下位尺度のほぼすべてに一定の影響を及ぼしているという重回帰分析の結果（表9）を反映したためと考えられる。

各自己愛類型が有する対人関係の問題を比較すると、高レベルを示す問題を有するのは混合型と過敏型のみであり、しかも複数の下位尺度について高得点を示したことから、全般的にみて混合型と過敏型、すなわち自己愛の「評価過敏性」得点が高い類型が、他の誇大型と低自己愛型よりも対人関係の問題が大きい傾向があるといえる。ただし混合型と過敏型では「見捨てられ不安」が共通して高いほかは問題の傾向は異なり、混合型では自己中心的な対人関係の問題が優勢であり、過敏型では基本的信頼関係の問題が優勢であると考えられる。

各自己愛類型の該当者が有する対人関係の特徴については、あらかじめ先行研究を前提に冒頭の「問題」の末尾で述べた以下の特徴を想定していた。すなわち、「過敏型」は対人関係が希薄、回避的で一体性を求め、「混

合型」は自己中心的で一体性を求め、過敏型よりは対人関係が希薄で回避的ではなく、「誇大型」は自己中心的であるが混合型や過敏型に比べると対人関係は全体的により適応的であり、「低自己愛型」は他と比べて自己中心的ではなく、「混合型」や「過敏型」に比べて対人関係は全体的により適応的であるというものである。本研究の結果から、これらの可能性はほぼ支持されたといえるが、付け加えるならば、誇大型と過敏型の自己中心性は同程度で、ともに低自己愛型よりも高く、混合型はさらに高いという特徴が明らかとなった。

次に、対人的価値観については、男女とも「指導・承認」得点は混合型、誇大型、過敏型、低自己愛型の順に高く、多重比較からは混合型が過敏型と低自己愛型よりも高かった。従って、混合型は他の人々の上に立ち、人々の尊敬や称賛を受けることに価値を置く傾向を最も強く持っていることが示唆された。一方、「独立・真実」、「同調」、および「支持・親和」の各得点については類型間に有意な差はなく、各自己愛類型に特徴的な対人関係の問題傾向とは関係なく、これらの価値観に明確な差がないことが明らかになった。

各自己愛類型の該当者が有する対人的価値観の特徴についても、あらかじめ先行研究を前提に本論文冒頭の「問題」の末尾で述べた以下の特徴を想定していた。すなわち、「混合型」、「誇大型」、および「過敏型」はいずれも自己顕示的・支配的な価値観が大きい、「低自己愛型」はこれらより小さく、「誇大型」は「混合型」および「過敏型」よりも同調、支持、親和的な価値観が大きいというものである。本研究の結果、自己顕示的・支配的な価値観である「指導・承認」は混合型が大きく、低自己愛型が小さいという部分のみが支持され、誇大型や過敏型については多重比較で明確な傾向が得られなかった。

本研究結果より、誇大型および低自己愛型

は、混合型および過敏型よりも心理社会的な適応が良い傾向にある一方、「指導・承認」以外の対人的価値観の大きさが類型間で無関係であったのは興味深い。その内容は積極性、自主性、社会的適応、誠実さといった社会的に望ましいとされる価値観であり、本研究からは、実際の対人関係場面における問題の大小に関わらず、ほぼ普遍的にこうした価値観が共有されていることが示唆された。その理由としては、臨床群ではない一般の学生を調査対象としたために、測定された傾向は健常範囲内における相対的なものであること、あるいは調査協力者が青年期の若者であるため、心理社会的不適応がある程度問題となっている場合でもポジティブな価値観を侵食するには至っていない可能性が考えられる。

#### 4. 今後の課題

本研究では男女別に自己愛類型化を行い、各類型の特徴を検討したため、各類型の人数が少なくなる結果となった。そのため分散分析後の多重比較では検定力が不十分となり、有意差が表れにくかった可能性が考えられる。従って各類型の該当者が示す特徴をより詳細に把握するためには、より十分な人数を対象に調査を行う必要があると考えられる。

また、本研究における調査協力者は一般健常者であり、年齢は青年期後期に限定した。しかし、本研究で言及した Gabbard、Kohut、岡野など現在の自己愛研究における基礎理論の多くは心理的援助を必要とする臨床群の研究から得られたものであるため、本研究の調査協力者にそのままあてはまるのかどうかについては疑問の余地がある。すなわち、一般健常群あるいは青年期特有の自己愛の問題と、自己愛性パーソナリティ障害との間の共通点や違いについては未解明の部分が多く、今後の研究の進展が期待される。

なお、本研究では青年期用対象関係尺度による測定結果を井梅ら（2006）に倣って“対

人関係の問題”として取り扱ってきた。しかし、井梅ら（2006）はこの尺度について「個人の対象関係を精密に測定できているとはいえず、心理援助が必要な判定基準を設けることはできない」と述べている。従って、本研究で論じている“対人関係の問題”の傾向は病的なレベルを指すものではなく、あくまでも健常レベルの範囲内の相対的な傾向を示していること、さらに、対人的価値観の結果ともども、個人の優劣などの価値判断を意味するものではないことを念のため確認しておきたい。

#### 付記

本論文は北星学園大学社会福祉学部福祉心理学科における2008年度卒業論文に加筆・修正を加えたものである。なお、本論文の一部は北海道心理学会第56回大会（2009年）にて発表された。

#### 謝辞

本研究を進めるあたり、親身なご指導をいただきました清水信介先生に厚く御礼申し上げますとともに、本論文をまとめるにあたり懇切丁寧なご指導をいただきました今川民雄先生に心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 相澤直樹 2002 自己愛人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50 (2), 215-224.
- Bell, M.D., Billington, R. & Becker, B. 1986 A scale for the assessment of object relations: Reliability, validity, and factorial invariance. *Journal of Clinical Psychology*, 42, 733-741.
- Gabbard, G.O. 1994 *Psychodynamic personality in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington, DC.: American Psychiatric Press. (ギャバード, G.O. 館哲郎 (監訳) 1997 精神力動的精神医学—その臨床実践 [DSM-IV 版] ③臨床篇 II 軸障害 岩崎

- 学術出版社 pp.83-116.)
- ゴードン・菊池章夫 1975 価値の比較社会心理学—理論と測定法— 川島書店.
- 井梅由美子 2001 青年期・成人期を対象とした対象関係尺度作成の試み お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 人間文化論叢, 4, 311-320.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子 2006 日本における青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, 14 (2), 181-193.
- 上地雄一郎・宮下一博 2005 コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14 (1), 80-91.
- 上瀬由美子 2000 友人関係 伊藤裕子(編) ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房 pp.140-161.
- Kohut, H. 1971 *The analysis of the self*: International Universities Press. (コフート, H. 水野信義・笠原 嘉(監訳) 1994 自己の分析 みすず書房.)
- Kohut, H. 1977 *The restoration of the self*: International Universities Press. (コフート, H. 本城秀次・笠原 嘉(監訳) 1995 自己の修復 みすず書房.)
- Kohut, H. 1984 *How does analysis cure?*: The University of Chicago Press. (コフート, H. 本城秀次・笠原 嘉(監訳) 1995 自己の治癒 みすず書房.)
- 中田知生・廣瀬毅志 2007 第12章 因子分析 村瀬洋一・高田 洋・廣瀬毅志(共編) SPSS による多変量解析 オーム社 pp.255.
- 小松貴弘 2004 過敏で傷つきやすいタイプの状態像 上地雄一郎・宮下一博(編) もろい青少年の心 北大路書房 pp.55-61.
- 中山留美子・中谷素之 2006 青年期における自己愛の特徴と発達的变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 中山留美子 2008 自己愛的自己調整プロセス—一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて— 教育心理学研究, 56, 127-141.
- 岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版社 pp.23-64.
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 2006 対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデル尺度における短縮版作成の試み パーソナリティ研究, 15 (1), 67-70.
- 鄭 曉齊 1987 価値観測定尺度の構成—中国と日本の大学生との比較において— 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 34, 69-96.
- Wink, P. 1991 Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61 (4), 590-597.